

英国植民地支配に別れを告げる:賠償要求が高まり、バルバドスは女王と絶縁

米ネット TV「デモクラシー・ナウ」12月1日放映より

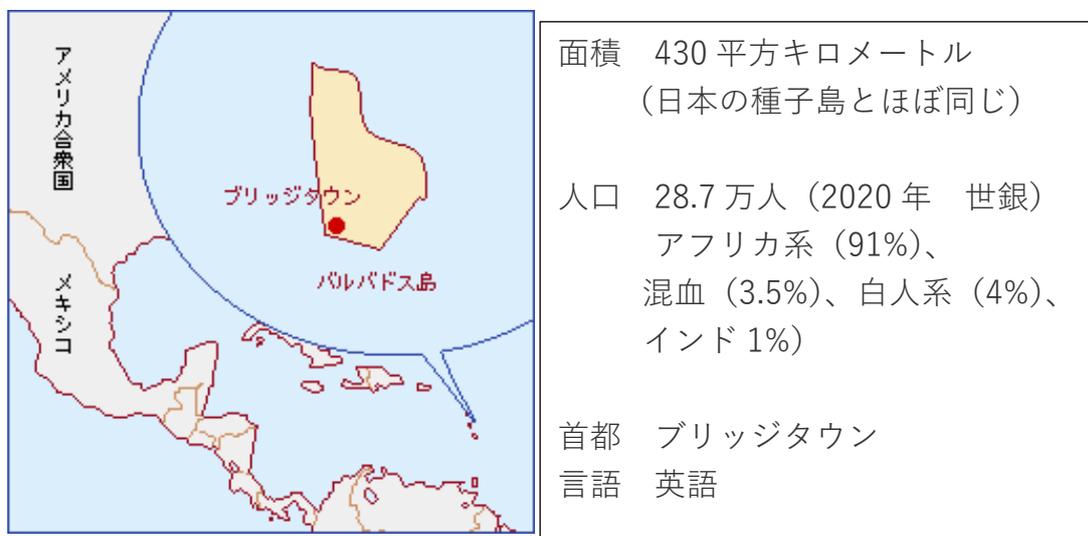
はじめに

カリブ海の島国バルバドスは11月30日、英国のエリザベス女王を国家元首とする立憲君主制を廃止し、共和制に移行しました。1966年に英国から独立して55年、植民地時代の過去から脱却する時がきたのだと人々は主張しています。この動きは、英国によるかつての奴隷制度についての賠償金支払いを求める運動の高まりにつれて起こりました。

報道によると、共和制移行の式典は11月29日、首都のブリッジタウンでおこなわれ、初代大統領に就任したデイル・サントラ・メイソン氏が宣誓し、「私たちは名実ともに国の主権者になることができた」と述べました。

英連邦に加盟する52カ国のうち、エリザベス女王を国家元首にしている国は、これで、カナダ、オーストラリア、ジャマイカなど15カ国となりました。現地メディアは、昨年、米白人警官による黒人男性の暴行死事件に端を発する黒人差別撤廃運動などを背景に、カリブ諸国でも奴隷貿易で潤った英国への反

発が強まった伝えており、同じカリブ海諸国では、ジャマイカやセントビンセント・グレナディーンなどにも君主制離脱の動きがあるとしています。



以下は、今回の離脱の意義について、米独立系メディア「デモクラシー・ナウ」のインタビューに答えた**デビッド・コミッショング駐 CARICOM (カリブ共同体) 大使**の発言です。同大使は長年、奴隷制の賠償にたずさわり、「国家を癒し、不況と再植民地化の時代の賠償訴訟」という著書があります。

以下、コミッショング大使とのインタビュー

完全独立の意義

司会 29 日の式典はどのような意義があるのでしょうか。

デビッド・コミッショング 式典は歴史的で、感動的な瞬間でした。27日には革命広場が正式オープンしました。自分たちの遺産と歴史、伝統を最高に祝うものでした。新大統領が就任して、英国の植民地支配に別れを告げたのです。式典は象徴的でした。軍部隊の旗、国防軍と沿岸警備隊、それに総督の旗が、チャールズ皇太子の前を「蛍の光」の演奏とともに行進して退場していきました。古いものが過ぎ去って新しい秩序が導入されたことを示しました。



まさに感動的な、歴史的な瞬間でした。55年も持ち越されてきたのですから。このことは本来ならバルバドスが独立した1966年11月30日に起こったはずだったのです。しかし、当時はいろいろな理由から2つの妥協をしたのです。憲法上の主権と独立についてです。そのうち憲法については2005年に、法制度を英国枢密院から切り離して、カリブ海司法裁判所を最高裁判所として設置することでした。そして今回2つめの妥協にとりくみました。つまり英王室が

ら離脱すること、それだけでなく世襲支配の概念も放棄して、民主的なプロセスで自分たちの大統領を選んだのです。

英国の植民地支配が残したもの

司会、400年間の英国植民地支配は、何を残したのでしょうか。

デビッド・コミッショ 名残はまだ残っています。（植民地の遺産を一掃する）仕事はまだ進行中なのです。バルバドスは**リトルイングランド**として知られています。実は、カリブ海にある英植民地全体の母のような存在でした。（合衆国の）バージニア植民地は1607年に設立されましたが、バルバドスは1625年からです。なぜかというとなバルバドスから砂糖革命が始まったからです。砂糖革命とは、奴隷制に基づくプランテーション生産で、そのシステム全体はここで始まり、完成されたのです。

大英帝国の奴隷法は（カリブ海の植民地で）強い影響を及ぼしましたが、それは1661年につくられたバルバドス奴隷法でした。この法律はその後ジャマイカに導入され、そこからカロライナと13の植民地全体に広がりました。ですからバルバ

ドスはイギリスのパワー、その経済力、政治力、軍事力、文化的権力の中心だったのです。歴史家は、18世紀の変わり目に、リトルバルバドスはイギリスへの貿易では、ニューイングランドとカロライナ、ニューヨーク、ペンシルベニアをあわせたよりも重要だったといっています。21世紀の今ではクレイジーに聞こえますが、当時、砂糖は麻薬のようなものでした。バルバドスはこのシステムを作り出したのです。アフリカ人の労働力を目いっぱい絞り取りながら、とてつもない富を作り出す制度でした。

その歴史の刻印は、そう簡単に取り除くことはできません。バルバドスの土地所有の形態には、植民地時代のものがまだ残っています。土地をもたないプロレタリアートがいるのです。黒人たちには計画的に土地が持てないようにされています。国民の健康状態にもこの時代の刻印をみることができます。バルバドスは糖尿病と高血圧の発症率ではおそらく世界一です。これは何世紀にもわたる奴隷プランテーションでの高圧環境のもとでの生活がもたらしたものです。そこはまさに世界で初の強制収容所で、奴隷たちは非常に乏しい食事しか提供されていなかったのです。

その後の世界の国際的、政治的秩序はどうだったでしょう。現実には、かつて奴隷化され、植民地化された国々や、バルバドスのようなカリブ海の人々は、従属

的な構造の下で搾取される国際秩序に押し込まれました。ですから何世紀にもわたった奴隷制と植民地支配と搾取の遺物がたくさん残っていて、私たちはいまでもそれを取り消そうと努力しているのです。

英国に賠償を支払わせる課題

司会 まさに賠償の問題ですね。なんらかのかたちで補償をさせようと続けられています。その可能性と見通しはどうなのでしょう。とくに大英帝国は世界史上最大の帝国で、いまでも非常に多くのコモンウェルスや旧植民地を持っています。そういう事実を照らすと、英国にとっては賠償は一つの前例になるかと思いますが。

デビッド・コミッショング 公正で正しく、法に根差した大義があれば、必ず達成されると思います。ただ追求には情熱と決意が必要です。バルバドスはカリブ海共同体（CARICOM）に入っています。カリブ海共同体は 15 の加盟国と 5 つの準加盟国で構成されています。準加盟国はまだイギリスの植民地です。加盟国のうち 14 カ国は独立国家です。ジャマイカ、トリニダード・トバゴ、ガイアナ、ハイチなどです。カリブ海共同体は、2001 年に「人種差別に反対する国連世

界会議」で、賠償請求の基礎を築きました。私たちはこの会議を、賠償の問題を提起する一生に一度の好機として意識的にとらえました。大西洋横断奴隷貿易と（もっとも野蛮な）チャattel奴隷制が人道に対する犯罪であるとして、賠償の問題を国際的な議題にしたのです。

そうこうして 12 年後の 2013 年のカリブ海共同体（CARICOM）首脳会議で、賠償請求を始めることに合意したのです。カリブ海のもともとの所有者である先住民にジェノサイドを行い、アフリカ人を奴隷化したことに対する賠償請求です。請求は英国にたいしてだけでなく、先住民の虐殺とアフリカ人奴隷化に関与したすべてのヨーロッパ諸国に対して行うことにしました。私たちはそのためカリコム賠償委員会を設立しました。その委員会を指導するのは首相級の小委員会で、そのトップにバルバドス首相が付きました。

私たちはこの請求を英国など西ヨーロッパの各国政府におこないましたが、言うまでもなく、最初のアプローチでは肯定的な反応を引き出していません。私たちがいったのは、「この歴史をみてください。あなたたちがしたことです。制度をつくって私たちを未開発したのです。何世代にもわたって私たちの資源と祖先の労働の成果を吸い上げてヨーロッパの首都にもっていったのです。不正手段で利益をえて平気にいるのですか。犯行現場に戻って、私たちと一緒に座って、あなたがたが加

えた損害の一部を弁償するのにどうしてくれるのか話をしましょうとっています。

当然のアプローチだと思いますが、彼らは今のところ肯定的に反応していません。

これからが闘いになります。私たちは国際的な大衆運動を発展させなければなら
いと考えています。1970年代と1980年代の反アパルトヘイト運動に匹敵す
る規模と広がりと力をもった国際的な大義の運動です。いまその仕事にとりかかっ
ています。

司会 29日の式典で英国のチャールズ皇太子がスピーチで次のようにいって
います。

チャールズ皇太子 この共和国の設立は新しい始まりですが、それは継続した
長い道のりの一里塚でもあります。その道はあなたがたが旅しただけでなく、私た
ちの過去の最も暗い日々と永遠に歴史を汚す奴隷制の恐ろしい残虐行為から
打ち立てられたものです。

司会 彼の式典参加には議論がありました。組織的な抗議があったと思いま
す。COVIDの安全性を理由に人々は参加を許されませんでした。今、チャー
ルズ皇太子と女王へ、そしてこの時点で世界にむけて何を伝えてたいですか。

デビッド・コミッショング チャールズ皇太子が奴隷の歴史に言及したのは非常に適切だったと思います。なんといってもバルバドスは世界初の奴隷社会でした。他の社会は、機能として奴隷制度を持っていましたが、バルバドスは、その経済、社会システム、イデオロギーを含めて完全な奴隷制に基づいて構築された人類史上初の社会でした。それが私たちの歴史なのです。王室は英国の奴隷貿易とアフリカの奴隷制度に深く関わっていました。それが歴史です。ですから彼がそれに言及する道徳感を持っていたのは良いことです。もう少し踏みこんで、英政府がバルバドスとカリブ海共同体の他の国々との賠償協議に応じるよう働きかけてほしかったですが。

王室の役割と王室が賠償問題の協議に参加する必要があるのかどうかということにも注意をはらう必要があります。私たちは賠償請求の運動を始めるにあたって、各国政府に焦点を当てました、各国政府は現在と過去の間の制度的なつながりであります。しかし長年にわたり、銀行、保険会社、大学など民間機関にも賠償請求の対象を拡大してきました。グラスゴー大学はその責任を認め、西インド諸島の私たちの大学との間で賠償プログラムを始めています。

私たちは家族にも目をむけるつもりです。バルバドスの国家賠償委員会は、英国のドラックス家について特別な研究を行うことを決定しました。ドラックス・ホー

ル・プランテーションは 1630 年代にバルバドスに設立されましたが、今でもあります。ドラックス家の今の代表はリチャード・ドラックス卿で、英国下院議員です。実際、彼は英国議会の最も裕福な議員です。その富はバルバドスの奴隷プランテーションから取り上げて、ジャマイカに持って行ったのです。

(以上)

【翻訳 田中靖宏】